

東洋大学史ブックレット 9



東洋大学

哲学のテーマパークとしての哲学堂公園

— 井上円了の哲学の具現化 —

東海林 克彦

東洋大学史ブックレット 9

哲学のテーマパークとしての哲学堂公園

―井上円了の哲学の具現化―

東海林 克彦

目次

一	哲学堂公園とは	1
二	哲学堂公園が目指したものの	15
三	哲学堂公園の利用の仕方	35
	あとがき	43
	参考資料	45

一 哲学堂公園とは

東京都中野区松が丘にある哲学堂公園（面積・約五ヘクタール）は、東洋大学の学祖である井上円了博士が建設した公園です（以下、本稿においては、学祖の井上円了博士のことを「円了博士」と呼ばせて頂くことにします）。

この公園は、「哲学のテーマパーク」と称されていることから分かるように、世界でも類を見ない非常に珍しい公園であり、円了博士の哲学世界を視覚的に理解できるように表現した「精神修養のための場」になっています。公園内の起伏に富んだ地形をうまく活かしながら、円了博士がデザインしたユニークな建築物、石碑、彫像、

庭園や地象などが「七七場」として体系的に配置されており、哲学に縁の薄い一般人達にとっても哲学の世界を親しみやすく体感できるような工夫が施されています。

施設の概要

哲学堂公園は何とも不思議な公園です。都市公園としての哲学堂公園の整備及び管理を東京都の職員として担当された前島康彦氏は、その著書¹⁾の中で「一度訪れた人は二度、三度と訪ねたくなり、はじめて見た人々は驚くことであろう。…(中略)…ひとたび、園内に入れば、園名の示すとおり何人をも哲学的雰囲気でつつみこんでしまう一種異様な閑静さわまる趣致が横溢していることに、改めて喜びを感じることであろう。」と評価しています。まさにそのとおりの公園であるといっても過言ではありません。

哲学堂公園は東京都中野区松が丘に位置しており、その面積は約五・二ヘクタールと都市公園としては中程度の規模になります。野球場、弓道場及びテニスコートの運動施設、児童公園を併設した総合的な公園になっており、最寄りの駅からは徒歩でのアクセスが容易に可能であることから広く老若男女に利用されています(表1、図1参照)。この哲学堂公園のうちで円了博士が哲学のテーマパークとしてデザインされた区域であるところのいわゆる「哲学堂」は、哲学堂公園の約六割に相当する部分になり、その中核部分については東京都の名勝などに指定されています(以下、本稿では当該区域を「哲学堂」ということにします)。

往時、周辺は武蔵野の面影を残す田園地帯であったようです。しかし、現在は都市化が進み、高層マンションなども立ち並ぶ住宅街になっており、数多くの動植物生息・生育する緑地としても自然環境保全上重要な役割を期待されているところです。

哲学堂は、七七場から構成されています。七七場は、哲学堂の正門として結界の役割を果たす「哲理門」、東洋哲学の孔子・インド哲学の釈迦・西洋の古代哲学のソク

ラテス・近世哲学のカントを祀った哲学堂の中心施設となる「四聖堂」といった建築物から、唯物園のシンボリックな施設として「物」という字が芝草で形作られている「物字壇」といった花壇、鬼が良心を表した灯籠を抱いている「鬼灯」といった石像、崖地の暗い裂け目に進化の根本である物の造化の神秘性を投影した「神秘洞」といった地象や空間が、哲学堂公園の起伏に富んだ地形を巧みに活かしながら随所に配置されています。円了博士は、この七七場を訪れる順番についても一定の推奨ルートを紹介しています。また、哲学堂公園の別の楽しみ方として「哲学堂八景」を紹介しています（このルート及び哲学堂八景については、「三 哲学堂公園の利用の仕方」において詳述します）。

表 1 哲学堂公園の概要

所在地	〒 165-0024 東京都中野区松が丘 1-34 Tel/03-3951-2515 Fax/03-3951-2280
交通	西武新宿線「新井薬師前駅」から徒歩 12 分 都営大江戸線「落合南長崎駅」から徒歩 13 分 ※駐車場はなし
開園時間	4月1日～9月30日：8時00分～18時00分 10月1日～3月31日：9時00分～17時00分
閉園日	年末（12月29日～12月31日）
施設概要	哲学堂（77場）、野球場、テニスコート、弓道場、児童遊園、売店など
面積	52,494㎡
管理者	中野区



図 1 哲学堂公園案内

表2 哲学堂の沿革

年	事 項
明治37年	四聖堂の開堂式を挙行
明治39年	哲学館大学長を辞職。精神修養のための公園としての整備に着手
明治42～45年	哲理門、六賢台、三学亭、常識門、髑髏庵などを建設
大正2年	「哲界一瞥」を刊行
大正2～4年	宇宙館、絶対城、鬼神窟などを建設
大正4年	哲学堂案内を刊行
大正8年	円了博士逝去。遺言による財団法人哲学堂の設立。第1回四聖祭（現在の哲学堂祭）の挙行
昭和8年	天狗松の枯死
昭和13年	妙正寺川の氾濫により不二橋が流出
昭和16年	妙正寺川の氾濫により望遠橋が流出。唯物園にも甚大な被害
昭和19年	東京都に寄付
昭和21年	都立公園として開園
昭和50年	都から中野区に移管。中野区立哲学堂公園となる
昭和63年	古建築物6棟と公園自体（時空岡、唯心庭、唯物園の区域）が中野区有形文化財に指定
平成21年	東京都名勝公園に指定

公園の沿革

(1) 整備の歴史

哲学堂公園の起源は、円了博士が明治三五年に大学の移転用地として約一万坪の土地を購入したことに始まります。円了博士は、その翌年には、哲学館大学への昇格を記念して、釈迦・孔子・ソクラテス・カントを祭る四聖堂の建設に着手しました。しかし、その後、哲学館事件^{※₁}の影響による体調不良などがあつたのではないかと推測されていますが、円了博士は大学の校長を引退するとともに、その頃から哲学のテーマパークとしての哲学堂の整備に本格的に着手し始めました。明治四〇年には哲学堂拡張予告を発表、明治四二年～四五年には哲理門・六賢台・三学亭・常識門・髑髏庵・無尺蔵などを建設、大正二年～四年には宇宙館・絶対城・鬼神窟などを建設、大正七年には硯塚を設置し、この頃にはほぼ現在の哲学堂の形が完成したといわれています²⁾。

(表2参照)。

これらの整備資金については、有志者からの寄付金ではなく、円了博士が全国を巡回して集めた講演や揮毫に対する募金で賄われたとのこと。円了博士は、「有志者から寄付を仰ぐのは本意ではないこと、国民道徳のおおもとである教育勅語の趣旨を普及啓発するために全国各地を巡回して講演や揮毫を行う必要があるが、その際に頂いた謝礼の半分を経費や慈善事業に、残りの半分を哲学堂の建設費や運営費に充てる」旨の決意を著書の「哲学堂案内」³⁾に記しています。しかし、この資金集めの方法については、現代では至極当然のこととして受け止められていますが、当時は学者にあるまじき行為とされ、「守銭奴」「俗学者」と批判されたよう⁴⁾です。しかし、円了博士は「字を書きて恥をかくのも今しばし、哲学堂の出来上がるまで」と取り合わないようにしていたといわれています。このように泰然自若としていられたのも、精神修養のための公園建設に向けての確固たる意志と熱意を持たれていたからであると考えられます。これを伺い知るものとして、円了博士が、哲学堂を世の中のためになる公

園として建設するに当たつての決意を詠んだ「哲学堂所吟之一」というタイトルの漢詩があります。原文は「草鞞竹杖席難温。浮浪身猶浴聖恩。沐雨梳風知世態。食蔬飲水味天尊。曲肱枕上眠能熟。容膝慮中樂却存。無位無官吾事足。終生不敢伺權門。」²⁾ですが、いささか難解であることから、ここでは「井上円了と哲学堂公園一〇〇年」の中で三浦氏が読み下した一文を紹介します。「草鯉と竹の杖で旅を続けて、席の温まるひまもなく、そんな浮浪の身でありながら、なお天皇の恩恵に浴している。雨に髪を洗い、風にくしけづりながら、世のさまざまな姿を知り、そまつな食事をし、水を飲み、仏の恵みを味わうのである。肘をまげて枕とし、眠ることよく深く、膝を入れるほどのせまい庵のうちにこそ、楽しみがかえつてある。なんの位もなく、いかなる官職もなく、それで我がことは充分であり、身を終えるまで、あえて権力のある者のところには行かないのである。」まさに、三浦氏が指摘しているとおり、この漢詩は、円了博士の信念の表れであり、あえて権力に近寄らず、自らの力と恵みによって

「独立自活の精神」で進んだ証左であると考えられます。

円了博士は大正八年に享年六一歳で逝去されましたが、その後、哲学堂は円了博士の遺言に基づき、財団法人による運営を経て政府に寄付されました。また、昭和二一年からは東京都の都立公園として供用され、昭和五〇年には東京都から中野区に移管されて「中野区立哲学堂公園」となり、世界にも類を見ない哲学のテーマパーク・精神修養のための公園として、また、桜の名所といった市民の憩いの場として、多くの人々に愛され続けています。

※注1 「哲学館事件」⁵⁾

当時、文部省は官学（国立大学など）の卒業者に対しては教員免許を卒業とともに与えました。が、私学の学生は別途に検定試験を受けなければならぬという規制がありました。円了博士

は、都内の私学の連合の代表者となつて、教員免許の私学への開放を求めて文部省と粘り強く交渉した結果、ようやく明治三二（一八九九）年に哲学館など四校に中等教員の無試験検定が認可されました。しかし、その第一回の卒業生が誕生する明治三五（一九〇二）年一二月に、哲学館は認可を取り消される事件が起きました。これが「哲学館事件」です。取り消しの理由は、倫理学の学生の答案の中に、「動機が善ならば弑逆（しいぎやく・主君や父を殺すこと）も許される」というミューアヘッドの教科書の一節を見つけた文部省の視学官が、国体に反するとして問題にしたからです。この事件は社会的な問題として発展し、文部省の私学撲滅策という批判もありました。井上円了はロンドンで事件の発生を知り、日本の狭さを実感したと述べています。

(2) 東洋大学とのかかわり

東洋大学にゆかりの深い地である哲学堂公園ですが、中野区が管理運営する都市公園になった今でも、東洋大学と哲学堂公園は密接なかかわりを持ち続けています。東洋大学では、大学関係者により毎年六月六日に、円了博士の祥月命日法要として哲学堂公園向かいにある蓮華寺において「学祖祭」を、一二月第一週の土曜日には、井上

表3 哲学堂公園において観察された多様な利用形態

自然観察、写真撮影、水遊び（菖蒲池など）、ドングリ拾い、散歩やウォーキング、読書、ベンチでの休息や歓談、写生、ピクニック、ジョギング、鬼ごっこ

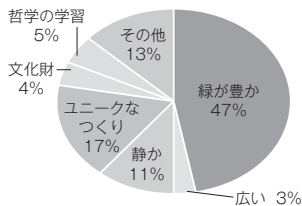


図3 哲学堂公園の利用上の魅力 (n=102、複数回答)

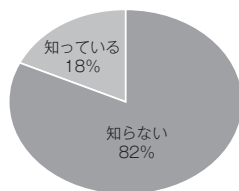


図4 哲学堂公園と井上円了との関係の認知状況



図2 哲学堂祭

円了博士の遺志により哲学の普及を願う「哲学堂祭」を哲学堂公園内で開催し、明治・大正時代を颯爽と生き抜いた円了博士の偉業に感謝と敬服の意を表しているところです（図2参照）。

利用の実態

円了博士が哲学の世界を視覚的に理解できるように表現した「精神修養のための場」としての哲学堂ですが、現在は周辺の都市化に伴い、都会の中のオープンスペースとしても重要な役割を果たしています。

思索のための逍遙の場でもあるとともに、時代の移り変わりとともに市民の憩いの場としての役割も大きくなっており、多義的な性格の公園になっています。

確かに、哲学堂の利用実態を調査してみても、哲学の学習のための利用もさることながら、ピクニックの場としての利用、写生や読書の場としての利用、子供たちの遊び場としての利用など、創設当初の円了博士が企図したものとは異なる利用がされているさらには否めません。また、哲学堂公園の利用者が感じている魅力ポイントや円

了博士との関係についても当初のねらいとは別物になっているようです(表3、図3、図4参照)。

しかし、実学を重んじ、哲学の通俗化(普及)や哲学の実践(実行)を使命と考えていた進取の気性に富んだ円了博士であるならば、博物標本や考古資料的な扱いをされる哲学堂に対しては「死学」であると喝破し、「余資なく、優暇なき市井の人のため」の「活学」になりうる哲学堂の今日的なあり方を考えなさい、といってくるのではないだろうか。円了博士の御息である井上玄一氏にしても、哲学堂の精神と主義を時代の変化の中で表現することを模索しており、大正一五年には東洋文明の国際化を目的とする研究所の設立や哲学に関する博物館・図書館の拡充を内容とする「哲学堂拡張私案」を、昭和一六年には万里の長城と北京の天壇をモチーフとした須弥山を模した形態の公園とする「哲学堂外苑計画」を発表しています²⁾。しかし、財政上の問題や戦争の影響などにより、実現には至りませんでした。

二 哲学堂公園が目指したもの

円了博士のねらい

(一) 円了博士の考える哲学とは

円了博士の専門分野は「哲学」です。円了博士は、東京大学文学部哲学科で哲学を学びました。お寺に生まれたことから仏教の教えなどに精通していたようですが、大で哲学に出会ったことが円了博士の人生の転機になったようです。「仏教活論序論」⁶⁾によれば、「自分はお寺に生まれて仏教を学び、次に儒学を学んだが、これを純全の真理とするには不足があったこと。また、キリスト教も学んだがこれも同じであった

こと。しかし、自分はずっと追い求めていた真理は、儒教、仏教、キリスト教にはなかったが、哲学の中にあつたことを見つけたことができたことは、このうえもない喜びであつた。」という趣旨のことを記しています。

「余はもと仏家に生まれ、仏門に長ぜしをもつて、維新以前は全く仏教の教育を受けたりといえども、余が心ひそかに仏教の真理にあらざるを知り、……たまたま大政維新に際し大変動を宗教の上に与え、廃仏毀釈の論ようやく実際に行わるるを見るに及んで、たちまち僧依を脱して学を世間に求む。初めに儒学を修めてその真理を究むること五年、すなわち知る、儒学も未だざるを。ときに洋学近郷に行われ、友人中すでにこれを修むるものありて、余に勧むるにその学をもつてす。……その後もつばら英文を学び傍ら『バイブル』経をうかがわんと欲す……すでにして友人中シナ訳の一本を有するものあり。ついでまたその原書を得、原訳相對して日夜熟読するに、……ヤ

ソ教また真理とするに足らず。……余これよりますます洋学の緬奥を究め、真理の性質を明らかにして、心ひそかに他日一種の新宗教を立てんことを誓うに至る。爾來、歲月勿々、早くすでに十余年の星霜を送る。その間余がもつばら力を用いたるは哲学の研究にして、その界内に真理の明月を発見せんことを求めたるや、ここにまた数年の久しきを經たり。一日大いに悟るところあり、余が十数年来刻苦して渴望したる真理は、儒仏兩教中に存せず、ヤソ教中に存せず、ひとり泰西講するところの哲学中にありて存するを知る。ときに余が喜びほとんど計るべからざるものあり。」

今、私達が思い描く「哲学」の学習とは、どちらかといえばソクラテスやカントといった著名な哲学者の著述や思想について歴史上の出来事を学ぶようなスタンスで暗記すること、といったイメージの方が一般的かもしれません。「哲学」は日常生活には役に立たない難しい学問と受け止められがちであるともいえます。しかし、フィロ

ソフィー (Sophie) の直接の訳語は「愛知(智)学」であり、当初は「希哲学」「汎知学」(※事理に明らかなこと・知ることを求めるための学問といったニュアンスになります)といった表現もされていました。ルードウィヒ・ウイトゲンシュタインが「論理哲学論考」⁷⁾において「哲学の目的は思考の論理的明晰化であること。哲学は学説ではなく活動であること。哲学の仕事の本質は解明することにあること。」といった趣旨のことを述べていることから類推できるように、哲学とは人間・社会・宇宙を知るためのものであり、本来の意味での教養を身につけるための学問なのかもしれません。イマヌエル・カントも「道徳形而上学原論」⁸⁾において「古代ギリシャの哲学は、三通りの学に分かれていた。すなわち、物理学、倫理学および論理学である。」といった趣旨のことを述べているように、人が人としてより良く生きていくための手段として学ばなければならぬことのすべてが「哲学」に関わることなのかもしれないと考えた場合には、円了博士が少年期から青年期にかけて追い求めていたものが「哲学」の中にあったと

いうことを悟ったことがよく理解できるのではないのでしょうか。

円了博士は、このような「哲学」を勉強することによって、批判的な思考が可能になることから、誤った価値観や通念にとらわれない考え方や生き方を身につけることができると考えていました。数学なども加減乗除から代数、幾何にいたるまで色々なことを学びますが、円了博士は、この数学についてさえも、日常生活において代数や幾何学を使うことが必要であるからだけではなく、思想練磨のために必要だから学ぶのであると考えていました。

円了博士の晩年の著書になる「奮闘哲学」⁹⁾においては、人間形成・社会形成のための基礎となる哲学という学問の意義を讃えた「哲学和讃」が掲載されています。哲学堂の設置のねらいを理解して頂くためには、円了博士の求めた哲学とはどのような意義の学問であったかを理解することが必要になりますので、少し紹介してみます(括

弧内の数字は何言目かを示したものです。

「人類ありし始めより、知恵の林におもむろに、栄えてここに哲学の、花の開くる世となりぬ。広き世界に哲学の、起こりし源を尋ぬるに、月日は定かならざれど、四千年余も前ならん（一〇二二）」

「例えによりて哲学の、効能書きを掲げんに、霧海における羅針盤、暗夜を照らす常夜灯。もしも哲学なかりせば、多くの人は迷信の、雲に迷うて生涯を、暗夜のうちに終わるべし（二二〇三）」

(2) 哲学の教えの普及を目指して

当時、日本で専門に哲学を学ぶことができる教育機関は、東京大学だけであったといわれています。学生数も極端に少なく、円了博士の入学時は学年でただ一人であっ

たようです。このため、円了博士は、人が人としてより良く生きるための学問であり、思想練磨の術でもある「哲学」の普及のために、哲学を学習することができるところを増やさなければならぬと考え、哲学館（後の東洋大学）を創設しました。

また、当時は、大学などにおいて高等教育を受けられる人はごく一握りの人達でした。地方に行けば、教育を受けたくても受けられない人が多く、迷信や妖怪などを信じて疑わない人達も多くいました。このため、哲学館で教育をするだけでなく、哲学館講義録を発行して全国各地への通信教育を行うとともに、全国各地を巡回しての講演活動も積極的に実施していったのです。このような貴賤の分け隔てなく広く知識の普及を図ろうとする円了博士の姿勢は、哲学館の開設趣旨の文書中にある「余資なく、優暇なき人のために」という言葉に象徴されているといっても過言ではないでしょう。「大学などによって勉強するだけの資金（経済力）や時間的余裕のない人」に対して教育の機会を開放し、これによって哲学の普及を図ることにより、西欧列強の脅威

にさらされていた日本という国を、豊かで幸せな国にして行くことを目指していたと考えられます。

このことの裏付けになるかと思われませんが、円了博士が「高野山では参拝客がたくさんいたのに対して、比叡山では非常に少なかった。この差は、高野山を開いた弘法大師は諸国をまわって一般庶民に対する布教を熱心にやっていた一方で、比叡山を開いた伝教大師はそのようなことをやっていなかったことによるものである。自分は、この弘法大師の考え方や行動を見習うようにしたい」といった旨の所感を述べていたと、御子息の井上玄一氏が哲学堂案内のはしがきにおいて書かれています。²⁾

「父が青年時代の所感に、余比叡山に登るに終日山に在りて一人の参詣する者ありを見ず。然るに高野山に到るに毎日登山の人群れを成す。叡山は其地京都に近く高野山は遠く僻地にあり、而して人の参集の度此の如く異なるは何ぞや。是れ其山を開き

たる祖師の遺徳の民間に及ぶと及ばざるとに由らずんばならず。夫れ叡山は伝教大師の開く所、野山は弘法大師の開く所にして、此両大師は前後殆ど其時を同うして世にあり。且つ共に非凡の豪傑なりと雖も、伝教大師は廟堂の高きに在りて民間に下らず。弘法大師は天下を周遊して専ら下民の教化に力を尽くせり。故を以て伝教の徳は人之を知らず、弘法の恩は今日に至りて忘るるものなし。今余の如きはもとより其才学と云ひ性行と云ひ此両大師の百分の一にも及ばずと雖も、余が願ふ所は伝教よりは弘法を学ばんと欲するなり」とある。此精神が父の生涯を通じて流れて居る。即ち本堂は父の高野山である。依って本堂の参観者は父が民間の一処士を以て終始し、一平民の立場から力を国家の根本に致さんとしたる其の活きた精神を汲んで戴きたい。」

(3) 可視化による哲学の教えの汎用化

哲学堂は、円了博士によって精神修養のための公園として整備されました。「西洋

には体を養う公園があると同時に、心を養う公園がある。教会堂がそれである。休日の半日を公園で費せば、必ず他の半日は会堂に費すことになっている。日本もこの心を養う公園がほしい。体を養う公園が日に月に増えているのに、心の公園がない。」¹⁰⁾という問題意識のもとに、肉体修養の公園と考えられていた浅草・上野・日比谷公園などとは異なる精神修養のための公園として哲学堂を位置づけています。

肉体を錬磨する方法としては運動や体操があり、これによって人は健康を維持しています。一方で、精神も肉体と同様に鍛錬することが必要であり、それが哲学を学ぶことであると円了博士は考えていたのです。また、円了博士は、想像力を豊かにすることの効用についても触れています。物理学上の力や化学の元素などの目に見えない感覚外の物事や道理を研究する場合には、想像するしかありませんが、その想像には、妄想や空想ではなく、確かな語彙力や体験に裏打ちされた理論的に確実な思考力が必要になるとして、観念の世界に終始することの危うさを指摘しています。換言す

れば、実践的な体験学習による教育を重視していたとも考えられます。

円了博士は、世の中には死教育と活教育の二種類があるという教育観を持っていました。死教育とは、教科書などによって知識や理屈ばかりを教えて、これを活用することを教えないという教育です。また、活教育とは、モノづくりのような実践的な体験学習を主体とした教育です。円了博士は、「空論を止めて、事実をもってせよ」という言葉に象徴されるように、ただ単に机上の論理を振りかざすことの愚を指摘していました。また、古人の格言を教える時も、今日の事情に適さないものをそのまま教えるのではなく、遠慮なく改作して教えることこそが格言を作った個人の本意でもあるといった柔軟な考え方をしていました。こういった柔軟な発想が根底にあった円了博士であったからこそ、哲学の世界を可視化したテーマパークとしての哲学堂を整備できたのではないのでしょうか。

前述したように、哲学を広めるために哲学館を創設し、全国各地における巡回講演

を始めた円了博士ですが、文字の読み書きができない人やその日暮らしの人達が数多くいる中で、すべての国民に学問が行き渡ることの難しさを痛感していたに違いがありません。西欧において教会の壁画やステンドグラスが教義を教える教科書のような役割を果たしていたように、哲学の世界の教えをできる限り可視化することによって身近なものとしてアプローチできるような環境を整備し、また、五感をもって心の奥底を揺さぶる感動をもって哲学を身につけてもらいたいという意図で哲学堂を整備したと考えられます。今日、聴衆の理解を深め関心を高めるためのプレゼンテーションの技法としての図や写真の活用は一般的なものになっていますが、円了博士の時代にあつてはその着想自体そのものも斬新なものであつたのではないのでしょうか。

また、円了博士は、妖怪の研究者としても知られており、妖怪博士の異名も持っています。これもまた「可視化」と相通じるところがあります。常に、一般市民にとって分かりやすい形態や事例でもって、難しいことであつても平易に説明をしようとす

る円了博士の態度やまなざしが感じられるところです。

妖怪の研究や講演を行った真意は、誤った価値観や通念にとらわれない考え方や生き方を身に付けることが重要であるというものでした。「妖怪の原理を究めることによって迷信をなくし、すべての人が貴賤上下の別なく、ともに同じように文明の恵沢を受けられるようにしなければならぬ」という言葉からもうかがえるように、人々が迷信に惑わされずに批判的な思考ができるようにするために迷信の研究を行つていたのです。円了博士は、本当の意味での教育を受けた人は、一時的な快樂に過ぎない肉体的快樂だけでなく、永遠に続く快樂である精神・知識・思想上の快樂を知ることができるようになると考えていたのです。

(4) 遊び心に富んだ柔軟な発想

人に何かを教える時には、その教えるべきことが相手にとってどんなにためになる

ことであっても、ただ単に棒読みをして教えるようなやり方では相手方に対して伝えるものも伝えることができません。こういった意味においては、教える以前の準備運動として、まずは教えるべき相手方の興味や好奇心を引き出すことが重要になってきます。場合によっては、びっくりさせるような演出も必要になってくることでしょう。円了博士の著述を読み、哲学堂の作りを見た印象や感想として、私は哲学堂を構成する七七場の奇抜な意匠や着想は、このような意図をもってデザインされたものではないかと考えているところです。初めて哲学堂を訪れた人は、哲学堂の意匠に驚愕し困惑することでしょう。そして前島康彦氏が述べているように、確かに「二度三度と訪れて何なのかを探りたくなる¹⁾」というのが人情かと思われれます。円了博士のお茶目なところというか、遊び心に富んだ柔軟な発想がうかがい知れるところです。

このことを裏付けるかのように、円了博士は、しゃれっ気のある道歌などを数多く残しています。「船頭多くして船山に登る」という格言をもじって、「学者多くして国

淵に沈み、先生多くして生徒屋根に登る」という格言を自分で作っています。また、「今の学者は貴族で困る、飯は食べても米知らず……」といった歌も作っています。けっして皮肉っぽい人ではなかったようですが、多数の学生が実際に忘れて空論に走りがちであったことから、こういった風潮を矯正して日本の社会を少しでも良いものにしたという一心から出たものであるようです。

また、昭和一〇年代に哲学堂の堂主だった石川義昌氏の談として、若かった頃のある日、円了博士から「今日は大御馳走をするから久しぶりに哲学堂に来ないか」と誘われていそいそと遠路哲学堂を訪ねたところ、その日の夕食はアジを焼いたのが一匹だけ粗末な膳に加えてあったのには驚いたというエピソードがあります。前島康彦氏は、この出来事を「一汁一菜だけが夕食だとすれば、朝食は汁だけだったのかもしれない、焼き魚一匹をつけることは、（哲学堂の整備や運営で資金繰りが大変であった）円了博士にとっては大御馳走であったに違いないのである。」と評しています。¹⁾しかし、これは円

了博士の儉約ぶりを表したただけのことではなかったのかもしれませんが。ほぼその頃の時代のことですが、遅塚金太郎氏がその著書「山水供養」¹¹⁾の中で、哲学堂を訪問した時の体験記を書いています。それによれば、七七場を巡った後、円了博士の接待を受け、「ビールが出て、日本酒が出て、筍ご飯が出て、さやえんどうを大根と牛肉の煮しめが出たことから、遠慮なく食べた」と記述されています。また、食後の茶うけに、雲州十六島海苔（十六島と書いて「うっぶるい」と読みます。島根半島西部出雲市の海岸で採れる岩ノリで、高級品とされています）を食べたとも書いてあります。「アジ一匹の大御馳走」には、何かもつと深遠な「シヤレ」があったのかもしれませんが。

着想の源流を探る

哲学堂は、円了博士の哲学世界を視覚的に理解できるように表現した哲学のテーマパークとでもいうべき空間です。「テーマパーク」といった発想自体、現代にあってはあまり珍しいものではなくてきていますが、日比谷公園ですら珍しいものとして登場していた当時としては、常人では考えもつかなかった斬新なものとして受け入れられたのではないかと考えています。むしろ時代の最先端を行き過ぎていたが故に、受け入れられるにはそれなりの時間がかかったのかもしれない。例えば、哲学堂創設の三年後の明治四〇年に刊行された東京市編纂の「東京案内」では、哲学堂は取りあげられていませんが、大正八年に刊行された東京女子高等師範学校附属高等女学校編の「遠足の葉」¹³⁾では、四聖堂や六賢台の紹介や眺望の良さが紹介されています。

(1) 回遊式庭園

この哲学堂の着想ですが、基本的には回遊式庭園がベースになっているのではないかと考えられます。回遊式庭園は、日本庭園の形式のひとつです。園路を使って庭園内を回遊し、築山、池、小島、橋、名石などで再現された各地の景勝などを鑑賞する

ものです。園路の所々には、散策中の休憩所として、また、庭園を眺望する展望所として、茶亭、東屋なども設けられます。円了博士が哲学を勉強した東京大学のキャンパスにも加賀の前田藩が整備した回遊式庭園が残されています。

(2) 自然主義

当時は、文学や芸術の世界でも「自然」が見出された頃でした。明治三十一年に、国木田独歩は、武蔵野を主題として、その風景美と詩趣を描きつくした著名な随筆作品を公表しました。国木田は、東京近郊の里地里山（人間の生活圏と自然とが入り交じる田園地帯）に毎日のように出かけては逍遙した体験にもとづいて「武蔵野」¹⁴を書き上げたといわれています。その中の「武蔵野を除いて日本にこのやうな処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、奈須野にもない、そのほかどこにあるか。林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのやうに密接している処がどこにあるか。」と

は、国木田が絶賛した武蔵野の情景をよく表している一節であるといえるでしょう。このような時代背景のもとで、円了博士が、都心を離れた田園地帯において教育を行うことに対する憧憬の念を持ったとしてもけっしておかしいことではないと考えられます。

円了博士は、アメリカの哲学者であるエマソン（明治一五年没）にも通じていたようですが、エマソンが著書の「自然」¹⁵の中で述べている「あの植物園の中に立つとき、どんな奇怪な、どんな野蛮な、あるいはどんなに美しいかたちをした自然物も、それを見る人間の内部の表現にほかならない、という妙な確信を覚える」「自然の全体が人間の精神の隠喩であり、比喩的表現である」「自然のすべての事実は、ある精神的な事実の象徴である。自然のあらゆる外貌は、精神のある状態に対応している。」という言葉を円了博士が知悉^{ちしつ}していたかどうか、また、円了博士の哲学堂着想の基底になつていたかどうかは不明です。しかし、エマソンの「自然」は、哲学堂のイメージ

とどこかしらオーバーラップするものとして捉えられる気がしてなりません。

(3) 山岳信仰の行場

七七場の「場」という用語ですが、山岳信仰(仏教)において各地に体系的な経路をなすように設けられた行場(修行の場)に由来しているのではないかと考えています。出羽三山や大峰山などは、山全体が修験道の修行の場としての道場として位置づけられています。また、主として江戸時代以降になりますが、富士信仰に基づいて富士山に模して造営された人工の山や塚が全国各地に整備されました。当時の富士山は、女人禁制であったり、遠くてなかなか行きづらいところであったことから、身近な場所に富士山を模倣したものを作って、誰もが手軽に富士参拝ができるようにしたものです。できるだけ多くの人々に教育の機会を与えようとした円了博士のことですから、修験道の行場と富士塚にヒントを得て、哲学堂が位置している小高い丘の和田山を哲

学の修行の場のミニチュア版として造営したのではないかと考えられます。

三 哲学堂公園の利用の仕方

哲学堂公園には、陰陽五行思想ではありませんが「動」と「静」の二種類の楽しみ方があります。「動」の利用は、円了博士の推奨するルートに従って七七場を順番に巡るものです。一方、「静」の利用は、四聖堂や躰龕庵などにおいて季節や天候によって様々な顔を見せる八種類の景観を楽しむものです。³⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾

表4 哲学堂77場の一覧

番号	名称	読み	概要	番号	名称	読み	概要
1	哲学園	(てつがくかん)	入口の石柱	40	後天沼	(こうてんぬま)	小さな池
2	真理界	(しんりかい)	入口の石柱	41	原子橋	(げんじきょう)	池に架かる橋
3	鑽仰軒	(さんぎょうけん)	門戸監守の家	42	自然井	(しぜんせい)	天然泉
4	哲理門	(てつりもん)	俗称は「妖怪門」	43	造化洞	(ぞうかかん)	断崖一帯
5	一元牆	(いちげんしょう)	境界の垣根	44	二元衝	(にげんく)	道の岐路
6	常識門	(じょうしきもん)	来観者の入口	45	学界津	(がつかいつ)	水辺のあたり
7	鸚鵡庵	(どくろあん)	入園受付の棟	46	独断峽	(どくだんきょう)	切り通し
8	復活庵	(ふっかつろ)	つなぎ廊下	47	唯心庭	(ゆいしんてい)	心字池の一帯
9	鬼神窟	(きしんくつ)	二階作りの客室	48	心字池	(しんじいけ)	心の字の池
10	接神室	(せつしんしつ)	鬼神窟の一階	49	倫理洞	(りんりえん)	川の淵
11	霊明閣	(れいめいかく)	鬼神窟の二階	50	心理崖	(しんりがい)	山側の崖
12	天狗松*	(てんぐまつ)	高い松の木	51	理性崖	(りせいげん)	池の中心の島
13	時空園	(じくうこう)	四聖堂周辺の平地	52	鬼灯	(きとう)	鬼の灯籠
14	百科叢	(ひゃっかそう)	木陰の草木	53	概念橋	(かいいんきょう)	池に架かる橋
15	四聖堂	(しせいどう)	哲学堂の中心建物	54	先天泉	(せんてんせん)	天然泉
16	唱念塔	(しょうねんとう)	四聖堂内の石柱	55	主観亭	(しゅかんてい)	休息所
17	六賢台	(ろっけんたい)	赤い三層六角建物	56	直覚径	(ちよっかくけい)	庭から丘への坂道
18	筆塚	(ふでづか)	筆の石碑	57	認識路	(にんしきろ)	迂回する坂道
19	懷疑巷	(かいぎこう)	道の分岐点	58	論理城	(ろんりいき)	庭から丘周辺
20	経験坂	(けいけんざか)	階段の坂道	59	演繹観	(えんえきかん)	傘形の休息所
21	感覺巖	(かんかくらん)	坂の途中の場所	60	掃納場	(きのうじょう)	三脚の休息台
22	万有林	(ばんゆうりん)	松林	61	意識駅	(いしきえき)	二脚の腰掛
23	三祖苑	(さんそえん)	三祖碑のある庭園	62	絶対城	(ぜつたいじょう)	読書堂
24	三字壇	(さんじだん)	石の腰掛	63	聖哲碑	(せいてつひ)	四聖の肖像碑
25	三祖碑	(さんそひ)	哲学者の石碑	64	観念脚	(かんのんきゃく)	二階の間電室
26	哲史録	(てっしりく)	哲学のこみち	65	観察境*	(かんさつきょう)	展望台
27	唯物園	(ゆいぶつえん)	物字壇のある庭園	66	記念碑	(きねんひ)	唐子の碑
28	物字壇	(ぶつじだん)	芝の「物」字	67	相對溪	(そうたいけい)	水のない溝
29	客観廬	(きゃっかんろ)	休息所	68	理想橋	(りそうきょう)	溝に架かる橋
30	進化溝	(しんかこう)	水を引く溝	69	理外門	(りがいもん)	本園の裏門
31	理化潭	(りかたん)	水を湛えた所	70	幽霊梅	(ゆうれいばい)	梅の木
32	博物院	(はくぶつてい)	堤	71	宇宙館	(うちゅうかん)	講義室
33	教理江	(きょうりこう)	妙正寺川	72	皇国殿	(こうこくでん)	宇宙館の内室
34	観象梁	(かんしょうりょう)	川に架かる橋	73	三学亭	(さんがくてい)	三角形の東屋
35	望遠橋*	(ぼうえんきょう)	橋	74	硯塚	(すずりづか)	硯の石碑
36	星界洲	(せいがいす)	川の対岸の城	75	無尽蔵	(むじんぞう)	陳列所
37	半月台*	(はんげつだい)	建築物	76	向上樓	(こうじょうろう)	無尽蔵の二階
38	神秘洞	(しんぴどう)	石窟	77	万象庫	(ばんしょうこ)	無尽蔵の一階
39	狸灯	(りとう)	狸の灯籠				

※は現存しない施設

七七場巡り…「動」の利用

哲学堂には、七七のポイントが体系的に設けられています。それぞれのポイントには円了博士自らの手によるデザインと呼称が付されており、さらに、一定の順番でこれらを見て回ることが推奨されています。これらの七七場の名勝及びデザインの意味するところは、円了博士の手でまとめられた「哲学堂案内」や中野区が発行している公園案内¹⁹⁾に詳述されていますので、ここでは、その順番と概略を記すにとどめさせて頂きます(表4参照)。

なお、哲学堂の全体構成の概略ですが、大きくは丘の上の平坦部分と左右に広がる丘の下の低地部分に分かれています。丘の上の平坦部分には、哲学堂の中枢をなす四聖堂・六賢台・三学亭などがあり、円了博士が古今東西の哲学者の中で代表的な人として選定をした孔子・釈迦・ソクラテス・カントの四聖、聖徳太子・菅原道真・荘子・朱子・龍樹・迦毘羅の六賢、平田篤胤・林羅山・釈凝然の三学を祀っています。



六賢台



哲理門



物字壇



時空岡一帯(左手は四聖堂、中央奥は六賢台)



心字池



四聖堂

ここから下界を見下ろすような形で、丘の下には低地部分が広がっており、この低地部分は右翼側が唯物園、左翼側が唯心庭の二つに分かれた構成になっています。おおよそのところ、このような三つのゾーンに分かれた構成になっていると理解しながら園内を巡ると、哲学堂全体のイメージがつかみやすくなります。

なお、この唯物園と唯心庭ですが、往時は、哲学の分野における学術的な論争の一つとして、唯物論と唯心論の二項対立的な命題があったようです。これに対して円了博士は、両者の発展的な融合理論としての「唯理論」を提唱していました。このような時代背景を透かしながら哲学堂を散策し、丘の上の四聖堂や六賢台からは、対立的な関係にあったとされる唯心論（唯心庭）と唯物論（唯物園）のありさまを客観的に見下ろしながら思索を巡らしてみるのが一考かと思われれます。

哲学堂八景…「静」の利用

哲学堂には、知名度は低いようですが「哲学堂八景」という景色を楽しめる名所があります。八景とは、その土地の風光明媚な状況を八つのポイントやシーンとして紹介しているものです。そもそもの八景の由来は、一一世紀の北宋時代に湖南省の洞庭湖に面した瀟湘（しょうそう）地方で、宋迪（そうてき）が選んだ「瀟湘八景」がはじまりです。これは、八つの主題（夜雨（水辺の夜の雨）、晚鐘（山寺の晚鐘）、落雁（田に降り立った雁の群）、晴嵐（朝霧に煙る松林）、帰帆（港に帰る漁船）、夕照（夕日に照らされた遠くの山）、秋月（水面に映る秋の月）、暮雪（夕暮れの雪景色））に基づいて選定されています。換言すれば、八景とは、地域を象徴する優れた景観を評価・選定するための手法のひとつである「見立て」であるといえるでしょう。

わが国における八景の選定事例としては、室町時代に琵琶湖の南西方面において、近衛政家が瀟湘八景に倣って選んだ「近江八景」が著名です。また、江戸時代では、神奈川県金沢の景勝地を選んだ「金沢八景」が代表的な例として挙げられます。なお、最近では、全国各地で八景の選定が行われており、その数は二〇〇を超えることが報告されています。²⁰⁾

円了博士が哲学堂において選定した八景は、①富士暮雪、②御霊帰鴉、③玉橋秋月、④水川夕照、⑤葉師晚鐘、⑥古田落雁、⑦鼓岡晴嵐、⑧魔松夜雨、の八つになります。それぞれの概要は、次のとおりであると考えられています。

- ①富士暮雪…四聖堂や鬮籠庵の軒先などから西南の方角に臨むことができる夕暮れ時の雪を被った富士山
- ②御霊帰鴉…葛谷御霊神社の社寺林をめぐらとするカラスが夕方に飛んで帰ってくる様子

- ③玉橋秋月…妙正寺川にかかっている橋とその上に出ている月。「玉橋」は多摩川の水が流水の一部になっていることに由来

- ④ 氷川夕照…江古田氷川神社とその社寺林が夕陽を反射して輝いている様子
- ⑤ 薬師晚鐘…西南西の方角に一キロメートルほど離れた所にある新井薬師梅照院において朝夕に鳴らされる鐘の音
- ⑥ 古田落雁…哲学堂の周辺の田んぼに降り立った雁や雁が隊列を組んで飛んでいく様子

⑦ 鼓岡晴嵐…哲学堂のある丘の一角が朝もやなどでけぼっている様子。「鼓岡」はこの丘の上が和田義盛の城であり、兵隊の演習で鼓を打ちならしたことに由来

⑧ 魔松夜雨…四聖堂の近くにあった大木の天狗松に雨が降り注いでいる様子

あとがき

平成二四年は東洋大学創立一二五周年に当たる年でした。小職は、それを記念して発刊された「哲学をしよう！考えるヒント30²¹⁾」の企画・執筆に携わることができ、機会を得ました。その企画・執筆にあたっては、井上円了博士の主だった著述を通読しましたが、あらためて井上円了博士の偉大さを痛感させられた次第です。

また、縁あって今回も哲学堂の所以をまとめる機会を得ることができました。哲学堂は円了博士の思想や行動を如実に表したものです。また、「田学」を旨としつつも向上門と向下門のバランスの妙を具現化したものであるとも考えられます。

「哲学をしよう！考えるヒント30」の編集後記にも書きましたが、現代は、大量の情報飛び交い、価値観も多様化した社会であるといわれています。このように複雑かつ混沌とした時代であるからこそ、今まで以上に、円了博士が重要視していた、物事の真理を見極めることのできる「考える力」が必要とされるのではないのでしょうか。「知識や情報」は時の経過とともに陳腐化しがちです。しかし、いったん身に付けた「考える力」は一生ものであり、決して古びることはありません。哲学堂を利用・体験することが、この「考える力（哲学的な思考を実践できる力）」の習得の契機となることを祈念してやみません。

末文になりますが、哲学堂公園の利用実態調査に協力をして頂いた東海林ゼミの学生諸君にお礼を申し上げさせていただきます。

参考資料

- 1) 前島康彦（一九八〇）、哲学堂公園（東京公園文庫21）、郷学舎、102p.
- 2) 三浦節夫（二〇〇二）、井上円了と哲学堂公園一〇〇年、井上円了センター年報第11号、井上円了記念学術センター、pp.53—134
- 3) 井上玄一編（一九一五）、故井上円了述 哲学堂案内、哲学堂事務所、35p.
- 4) 高嶋米峰（一九三九）、井上円了先生、随筆「人」、大東出版社、pp.19—20
- 5) 東洋大学（二〇一三）、哲学館事件、東洋大学ホームページ、<http://www.toyo.ac.jp/site/enryo/founder09.html>、二〇一三年一月一日

- 6) 井上円了(二八八八)、仏教活論序論(井上円了選集第三卷)、東洋大学(一九八七年出版)、pp.336—337
- 7) ルートヴィヒ・ウイトゲンシュタイン(一九二二)(野矢茂樹訳)、論理哲学論考(岩波文庫)、岩波書店、256p.
- 8) イマヌエル・カント(一九七六)(篠田英雄訳)、道徳形而上学原論(岩波文庫)改訳、岩波書店、189p.
- 9) 井上円了(一九一七)、奮闘哲学、東亜堂書房、494p.
- 10) 井上円了(二八八八)、哲学堂の由来(井上円了選集第二卷「南船北馬集第三篇」)、東洋大学(一九八七年出版)、p.559
- 11) 遅塚金太郎(一九三三)、山水供養、春陽堂、pp.239—245
- 12) 前島康彦(一九八〇)、日比谷公園—日本最初の洋風国民広場(東京公園文庫21)、郷学会、96p.
- 13) 東京女子高等師範学校附属高等女学校編(一九一九)、遠足の栞、東京女子高等師範学校附属高等女学校、pp.84-88
- 14) 国木田独步(二八九八)、武蔵野(新潮文庫)、新潮社、309p.
- 15) ラルフ・ウォルドー・エマソン(一八三六)(斎藤光訳)、自然について、日本教文社、302p.
- 16) 井上円了(一九三三)、哲界一瞥、国民道德普及会、33p.
- 17) 出野尚紀(二〇一一)、哲学堂八景、井上円了センター年報第20号、井上円了記念学術センター、pp.119—146
- 18) 中野区(二〇二二)、哲学堂保存管理計画、中野区、113p.
- 19) 中野区哲学堂公園管理事務所(二〇一一)、ガイドマップ東京都指定名勝哲学堂公園、中野区哲学堂公園管理事務所
- 20) 青木陽二・榊原映子編(二〇〇七)、八景の分布と最近の研究動向—過去の景観評価データ一、国立環境研究所、255p.
- 21) 東洋大学(二〇二二)、哲学をしよう—考えるヒント30、大成出版社、366p.

東洋大学史ブックレット9

哲学のテーマパークとしての哲学堂公園

—井上円了の哲学の具現化—

二〇一四年三月二〇日 発行

編集

東洋大学井上円了記念学術センター

著者

東海林 克彦（東洋大学国際地域学部教授）

発行

学校法人東洋大学

東京都文京区白山五―二八―二〇 〒一一二―八六〇六

印刷所

株式会社フクイン

東洋大学